

曉荘試験師範学校における陶行知の生活教育理論の展開についての考察

陳 淑 敏

目 次

はじめに

1 生活教育理論の意味について

1-1 生活としての教育 「生活即教育」

1-2 社会としての学校 「社会即学校」

1-3 「做」を中心とする教学做合一

2 曉荘試験師範学校における生活教育理論の展開

2-1 曉荘試験師範学校の創設

2-2 中心学校を中軸とする生活教育の展開

3 曉荘試験師範学校を支える根本的なもの

結 語

注・文献

はじめに

1985年上海において、子どもを暗記やドリルの反復といった課業の圧力から解放して、自ら考える能力の育成に重点を置く素質教育を中心とする教育改革が行なわれはじめた。この教育改革は、これまでの受験教育を脱却するものとして全国の注目を集めた。それは早く大きな都市を中心に中国の全土に広がりつつある。しかし、素質教育は書物を中心とする知識詰め込みの受験教育に反対し、実際の生活に応じる子どもの能力を育てることを重視するが、その能力の意味づけ及びそれを養成する方法論を明確にしていない。そのため、実際の教育の現場においては、これまで軽視されていた絵画、体育、音楽などの授業を充実させることが、その改革の主な取り組みとしてなされているにとどまり、子どもの能力養成に有効

な方法があまりみられない。また、課業の圧力から子どもを解放しようとするこの教育改革は、学校における課業の圧力からは解放しても、実際には子どもの負担を減少するわけではない。子どもは学校の授業を受けるだけでなく、放課後、絵画や音楽などの稽古をさせられているからである。

また、1970年代の末から「一人っ子」政策が実行されて以来、都会での義務教育が徹底的にされているのに対して、いまなお農村部においては労働力の不足などのため、小学校の低学年から学校をやめることは多い。そのため、都会と農村部との教育の格差はますますひらきつつある。さらに、都会を中心として展開されている素質教育は、農村部の状況に当てはまらないことは少なくない。そこで、人口の大半を占めている農村部の教育を改善するために、それに応じる方法がなければならない。これが現在中国の教育改革にとって大きな課題の一つとなっている。以上のような問題を抱えているので、素質教育改革は期待されるほど大きな成果をあげることができないのである。

本論文で扱った陶行知(1891-1946)は中国の半封建・半植民地の時代に生まれ、複雑で激しい変動の社会の中で活躍した教育者・教育学者である。1917年アメリカ留学より帰国した陶行知は、南京高等師範学校(1921年東南大学に改称)に在任中、文字と書物とばかりを重視した「老八股」とよばれた伝統的な旧教育と、外国の教育を教条的に模倣した「洋八股」とよばれた新教育を批判した。それとともに、実際の生活を中心とした生活教育理論を提案した。また、教育を国の根本と考えた彼は、積極的に平民教育運動に身を投じた。その平民教育運動の実践の中で、人口の大半を占める農村教育の立ち遅れたことを目にした。そして、中国教育の出口が郷村教育にあることを強く意識したのである。郷村教育を推進するために、郷村教師を育成しなければならない。そして、郷村教師を育てることを目指した曉荘試験郷村師範学校(以下略称-曉荘師範)を開設した。そこにおいて、彼は「生活即教育」、「社会即学校」、「教学做合一」という三つの理論を中心とした生活教育理論を展開した。曉荘師範では、将来教師になる学生の生活力や創造力を育てることが重視されている。本論文では、曉荘師範における陶行知の生活教育理論の展開についての考察を通して、現在中国において行われている素質教育改革、特に農村の教育改革に役立てる途を見つけてみよう。まず陶行知の生活教育理論の概略を明らかにしておこう⁽¹⁾。

1 生活教育理論の意味について

1-1 生活としての教育 「生活即教育」

陶行知は1927年に創立された暁荘師範において、生活教育理論に基づいて実践を行うと同時に、実践を通してその理論を検証しようとした。この理論の中心的な原理の一つは、「生活即教育」であった。よく知られているように、デューイは人間の基本的な関心事を再現している木工や裁縫や料理などを中心とする仕事を通して、意図的な教育（学校教育）を行おうとした。このような教育を陶行知は「教育即生活」と呼んでいる。しかし、「教育即生活」における「生活」とは、あくまでも教育の側から切り取られ編成された生活であって、中国の生活の現状に合わない。そこで陶行知は、重点のおき方を回転させて、生活の側から教育を生活のうちに組織化しようとする。陶行知は「教育即生活」を「生活即教育」に転回すべきだと主張したのである。彼の生活教育理論を明確にするために、まずこの「生活即教育」の意味について検討してみよう。

陶行知は生活教育について繰り返し言葉を換えて定義し直している⁽²⁾。しかし、表現は異なっているが、基本的な意味において大きな差異はないようである。彼によれば、生活教育とは実際の生活を通して、「進歩的な生活」が「遅れている生活」を導くことである。このようにして、民衆はよい生活を実現できるようにする。つまり、生活によって遅れている生活を改造するのを通じて、民衆の生活レベルを上げることである。伝統的な教育は、教育のために教育を行い、教育と生活とは分離している。それに反して、陶の生活教育は、教育を実際の生活に結びつけることを強調する。さらに、生活教育では生活が教育を決定する。教育は生活を通してはじめて真正の教育になる。このように表現してしまうと、生活と教育とは最初から別々なことであると理解されがちであるが、陶行知がはっきり表明しているように、生活と教育は「一つのもので、一つのことの二つの名称」なのである（2-649『陶行知全集』第2巻、649頁を示す。以下同じ）。

上記において示したように、陶行知の生活教育の生活とは、『学校と社会』の中でデューイの言うような、人類がすべき典型的な諸仕事のことではなく、実際の生活のことであり、端的に言えば民衆の実際の生活のことである。しかし、陶行知の生活教育における生活は、すべての生活を指すものではない。陶行知の言う「実際の生活」とは、さまざまな実際の生活のなかの進んでいる生活を指している。彼の言葉で言えば、「生活教育は生活の力を利用して生活を改造するのである。目的と計画がある生活を利用して、目的と計画がない生活を改造する。」（2-559）従って、陶行知の生活教育は、「意図的な生活教育」と言うほうがより適

切である。

以上は生活教育の内容を明らかにしたが、次節において、生活教育のもう一つの原理として、「社会即学校」の思想について検討しておこう。

1-2 社会としての学校 「社会即学校」

当時の中国においては、「教育即生活」と同じように、「学校即社会」という言葉で言い表された理論も、デューイの教育理論と考えられていた。よく知られているように、デューイによれば、学校は、社会の典型的な要素を取り入れた特別に作られた環境である。しかし、陶によれば、「学校即社会」という考え方では、学校教育は狭隘化を避けることができないという。「学校即社会」は一つの小さな学校の中に、社会の典型的なものを取り入れようとするのであったので、容易に偽りのものを弄ぶこととなる。そこで、陶自身は「学校即社会」を転回させて、「社会即学校」を主張したのである。この転回は、前に述べた「教育即生活」を「生活即教育」に転回された当然の帰結ということができる。

「社会即学校」によれば、社会活動全体こそが教育の領域である。そこでは、どのように社会活動が学校と関連するかではなくて、両者の血脈は自然につながっているととらえるのである。比喻で言えば、「社会即学校」は、かごの中の小鳥を空に放ってやり、自由に飛べるようにしてやるということである。学校のすべてを社会と自然の世界に結び合わせようというのである(2-491)。また、「社会即学校」の立場に立つとき、教育の材料や方法や教育の道具及び教育の環境などが豊かになってくる。この原理によって、学校の内外のすべての人が自由に相互に交流することができるし、お互いが学び合える教師や学生となることが可能となると考えている。それと比べれば、「学校即社会」という理論のもとでは、学校における資源が少なすぎるのである。何より校外の経験豊かな農民に学べないし、反対に、学校にある役立つものを、校外の人にも教えることができないのである(2-506)。

伝統的旧教育の学校においては、子どもは「本の虫」といわれるように知識はあっても生活力がないものに変えられた。つまり、学校は「本の虫を製造する工場」(2-413)となっていたのである。陶はそのような旧教育の学校を批判し、学校は学生に生活力を与えなければならないという。また、学校を評価する基準は、「校舎」や「設備」の如何ではなく、学生の生活力が豊かであるか否かによって決まるとされる(2-336)。このように実際の生活を教育の出発点とし、国民の生活力を目指す学校は、中国の教育改造の責任を担うものであった。ここで重要な疑問に会う。陶が言う「社会即学校」は、学校の存在を否定することなのだ

ろうか。そうではない。この原理は、社会生活を学校教育の中軸とする一方で、学校を社会生活を改造する中心として位置づけるのである。ここに私たちは、デューイの学校論との共通性を確認するとともに、あくまでも社会と生活に重心を置こうとする陶の学校論の特徴を見ることができるだろう。

1-3 「做」を中心とする教学做合一

陶行知の生活教育理論の中心の二つの原理「生活即教育」と「社会即学校」を明らかにしたが、これから生活教育の三つ目の原理と言える「教学做合一」について述べよう。

論文「教学合一」(1919)において、陶行知は次のように述べている。「教えることと学ぶことは、実は分離することのできないものであり、まさに合一すべきものなのである。」(1-21)そして、陶は「教学合一」の根拠として、第一に、学び方を教えることが教師の責任であること、第二に、教学方法は学習方法に基づかなければならないこと、第三に、教師自身が学問をしなければ人を教えられないことの三点を指摘していた。彼は暁荘師範プランの理論を述べた「中国師範建設論」(1926)において「教学做合一」について系統的に論じていたが、論文「教学做合一之教科書」(1931)では、それについてより明確に定義した。これからまず、「教学做」の意味を明らかにしておこう。

陶によれば、教学做というのは、次のようなことを示している。まず、教える方法は、学ぶ方法に基づかなければならない。そして、学ぶ方法は、做(なす)方法に基づかなければならない。事をどのようになすかに即してそのように学ぶ。どのように学ぶかに即してそのように教える。教えと学びとはなすことによってはじめて実現することができる。そのとき、なすことによって教えるのが先生、なすことによって学ぶのが学生である(2-650)。この説明からわかるように、教えと学びの中心である做(なす)ことが重要である。つまり「做」の理解がこの説明のポイントとなる。

做(行動または実践)とはなすことであり、「劳力」の上に「劳心」することなのである。つまり手と脳をともに用いることである(1-128)。彼は、後に論文「教学做合一之教科書」(1931)の中で、なすことの意味を次の三つにまとめている。すなわち、1. 行動、2. 思考、3. 新たな価値の作り出し、である。そして、なすこととは創造であり、実験であり、建設であり、生産である。陶において、なすとは三つの特徴によって示されているように、単なる盲目的な行動ではなく、合理的に道具を使いつつ、思考を伴うものである。このように彼は、伝統的教育の中で無視されてきた行動(実践)の重要性を強調している。しかし、

彼は書物を読むことを軽視するわけではない。彼によれば、書物は死読すべきものではなく、活用しなくてはならない(2-494)。教育を自己目的化した書物中心の教育から脱却して人生に役立てるものにしようとしたのである。

次に、「教」の意味について述べよう。伝統的学校においては、教師の仕事は知識を教えることである。それに対して、陶は、学校において教師の仕事とは、「学ぶことを教え、学生にどのように学ぶか教える」ことであると主張する(1-22)。すなわち、学生に学習の方法を教えることなのである。より正確に言い表すなら、それは具体的な問題解決の中で、教師の指導のもとで、学生が自ら問題を解決する方法を探ることを通して、思考の方法を学ぶのである。また、この問題を解決する経験を、他の問題を解決するときを生かすのである。この見方は、デューイの問題解決学習を活用したものであると言えよう。

上記から、教師の仕事は学生に学ぶ方法を教えるにあるということが明らかになったが、学生はいったい何を学ぶのだろうか。これについて陶は次のように述べている。

「学の意味は、自ら学ぶということであり、座って教えるを受けるということではない。生の意味は生活あるいは生存ということである。学生が学ぶのは人生の道理である。」(1-316) 人生の道理や生活を学ぶ学生に対して、教師は、実際の生活を通してしかそれを教えることはできないのである。換言すれば、教師は生活における事(こと)によって教えるわけである。このようにして、教・学はこれまでのように分離をしないだけでなく、教・学は做をもとにして合一しなければならぬのである。このようにして、「教学做」は一つの共通の中心、つまりなすことをもつことになる。それは実際の生活を意味しており、より明確に言う、日常生活を意味している。また、「教学做合一」は「他のものではなく、生活法であり、生活教育を実現する方法」である(2-558)。そこで、教学做合一は「生活法でもあり、教育法」でもあるというのである(2-650)。

教学做合一という理論の形成が、デューイの「なすことによって学ぶ」という教育思想から影響を受けたことは、中国内外の研究者によっても認められている。しかし、中国の研究者たちの中には、陶の教学做合一という理論は、デューイの「なすことによって学ぶ」を超越したものとして評価しているものもある(郭筌、華東師範大学紀要(教育科学版)1986年3-19頁)。確かに、デューイの「なすことによって学ぶ」には、文字表現からみると、教えるという意味が入っていない。しかし、そのなすことは、教師が子どもの興味や能力などによって、生活における「社会活動の諸形態の典型」を示すことから選ばれたことである。デューイによれば、学習は子どもが子ども自身のためになすことであるから、主動性は子どもにあ

る。他方、教師はなすことの共同の参与者であるとともに、案内者であり、指導者でもある。教師の指導のもとで、教師の設定した環境を通して、子どもは具体的な経験（なすこと）によって探究としての反省的思考の方法を身につけるのである。従って、デューイの「なすことによって学ぶ」も教学做合一である。そのように考えると陶の教学做合一は、デューイの「なすことによって学ぶ」を、中国の当時の実際の状況に合わせ活用されたものではないかと考えられるのである。

以上、生活教育理論の三つの命題の内容を明らかにしたが、これからは、それは曉莊師範学校においては、具体的にどのように展開されたのかについて述べることにする。

2 曉莊試験師範学校における生活教育理論の展開

2-1 曉莊試験師範学校の創設

1917年南京高等師範学校（東南大学）の教授として迎えられた陶行知は、大学の中の教育課程改革に取り組むと同時に、平民教育普及にも力を入れた。1923年彼は、東南大学の職をやめて「平民教育運動」に没頭した。この平民教育運動の実践を通して、彼は中国の教育の現状をもっと知っているようになった。当時の郷村教育の現状について、陶は次のように捉えている。「飯を食べるのに稲を植えず、衣服を作るのに綿を植えないことを人に教える。」(1-100)「郷村教育は、人々に贅沢を羨望し、野仕事を軽蔑することを教える。それは、人々に消費することは教えるが、生産することは教えない。それは農民の子どもを教えて本の虫に変えてしまう。それは富んでいるものを教えては、とりわけ貧しいものに変えてしまい、強いものを教えては、とりわけ弱いものに変えてしまう。」(2-335)

教育を立国の根本と見なした陶は、中国の教育の出口は郷村の実際の生活に応じる生きる教育を建設することにある(1-100)と考えた。彼は郷村学校における進んだ生活を通して郷村生活を改造しようとしたのである。これによって中国の人口の大半を占めている農村社会を徹底的に変えるのを目指した。それは彼の教育による救国の理念と言えるであろう。このような目的を達成するために、まず、郷村生活を改造する魂としての「郷村教師」が必要である。郷村教師を育てることがこの目的を実現するための一番火急な課題となった。そこで、陶行知を中心とする中華教育改進社が、郷村教師を育成することを目的とする試験郷村師範学校—曉莊試験師範学校を創立することになった。

1927年3月11、12日二日間の入学試験を行い、試験科目は農作業か土木作業、知力テスト、常識テスト、国語の作文、三分間のスピーチであった(1-107)。学生募集の定員は20

名であったが、さまざまな経歴の持ち主13名^④が合格した。3月15日南京北郊勞山麓の小莊に曉莊試験学校の開校式を挙げた。開校式とはいえば聞こえよいが、校舎もなく、ただ学校建設予定地にテントを四つ張っただけの貧しいものであった。開校当初は、指導員と呼ばれた教師と学生の宿舎から、図書館、教室などに至るまで師範学校で独自に使用する建物は、彼らが自ら「ちがや小屋」を造ることでまかない、さらに二百畝の荒地を農地に開墾することも行った。このようないわば白紙の状態から、自分たちの生活基盤を築き上げていくのである。陶は次のようにこの学校の特徴を捉えている。

「曉莊は普通の学校とは違う。一つに校舎がなく、二つに教員がいない。私たちの校舎の天井は青い空、床は大地なのだ。私たちの精神は天地の間にみなぎっていなければならない。本校には、ただ指導員がいるのみで、教師はいない。教えるのが専門の教師はおらず、いるのは学生よりも些か経験があり、些か学識の深い指導員のみなのだ。農夫・村の婦人・漁師は皆、私たちの指導員となり得るのだ。と言うのも、私たちはとても彼らには及ばないからである。私たちはこの二点をはっきりと認めてはじめて広大な郷村教育の道を前進することができるのだ。」(2-344)

この引用からわかるように曉莊師範は社会を学校とし、実際の生活経験が豊かな人に指導してもらうことによって教育を展開するユニークなものである。ここにはすべての課程はすべての生活である。課外の生活もないし、生活外の課程もないのである。陶によれば、学校は必ずしも校舎があるとは限らなくて、あれば便利であるが、学生と先生がいさえすれば、学校ができるのである(2-380)。陶はあくまで郷村の人々の生活を中心に教育をとらえ、彼らに指導されることで、その生活に根ざした教師を育成することを意図していた。また、彼は、学校における教育を学校の校舎の中における教授に限定するのではなく、「郷村」という共同体における生活が教育であるように、学校を組織しようとしたのである。陶はこのように校舎もなく、専任の教師もない実践学校において「生活即教育」「社会即学校」「教学做合一」を中心とする生活教育を展開した。これは陶行知の生活教育理論の新しい試みの段階に入ったことを意味した。

2-2 中心学校を中軸とする生活教育の展開

郷村教師を養成する曉莊師範の出発点は、本校に属する「中心学校」にある。陶行知はこれまでの付属学校や実習学校という言葉自体に含まれている理論と実践とが分離したイメージを取り消すために、中心学校と命名したのである。中心学校は、郷村の実際の生活を中心

にすると同時に、社会を改造する中心でもあり、師範学校の中心でもある(2-360)。陶行知は、郷村の実際の生活から生まれた中心学校を中軸にして師範学校を創ろうとしたのである。彼は、このような師範学校において養成された郷村教師を通して、生きる学生を育てるといふ郷村教育を達成しようとした(2-339)。陶は、教育特に郷村教育によって、西洋諸強国及び日本の侵略に苦しんでいる中国を救おうとした。彼のこの考え方は教育による救国⁽⁴⁾といえるであろう。

陶は、師範学校とその中軸とする中心学校との関係について次のように述べている。「中心学校は師範学校の頭脳であり、師範学校の付属品ではない。中心学校は師範学校の母親であり、師範学校の息子ではない。中心学校が太陽であり、師範学校が惑星なのである。」(1-105)ここから明らかなように、暁荘では、師範学校の建設と平行して、「中心学校」の建設が重要な課題とされた。なぜこれほどまでに「中心学校」が師範学校にとって重要な位置づけをなされたのであろうか。陶はこれについて次のように述べている。

「環境の中に子どもの成長に影響を与える力が二つある。すなわち、一つは子どもの成長によい力——助力、もう一つは子どもの成長に悪い力——阻力である。それらについて具体的に分析してから教育の実践を行うのである。郷村における実際の生活の中で子どもの成長に影響を与える具体的なことが多いから、学校の中にそのすべてを入れることができないわけである。それゆえに、次の仕事はその具体的なことの価値について評価することである。この評価する仕事を済ませてから選択する必要がある。その中の価値の低いもの、すぐに必要でないもの、及び学校で教える必要がないもの、または学校で教えることができないものなどを除外して、残るものを学校に入れ、教材に編集し、カリキュラムを作り、それに応じる設備を備え、適当な順序によって教師は、学生になすことによって学ぶことを指導する。そして、そのために中心学校ができるようになった。このような学校には根があり、自然生活と社会生活と関連がある。それだからこそ、学校は環境に応じるし、環境を改造することができるのである。」(1-92-93)

この引用からもわかるように、中心学校の出発点は郷村における子どもの生活にある。子どもの成長によいことを選択し学校にとり入れて、教師の指導のもとで、子どもがなすことによって自ら学ぶのである。ここにおいて明らかなように、陶の生活教育は実生活そのものによる教育ではない。また、この中心学校はやはりデューイの言っている特別に作られた環境と読みとってよいであろう。

陶は中心学校を創立する理念を明確にただけではなく、それについての具体的な運営方

法をも明らかにした。中心学校には、一つは特約中心学校と呼ばれるもので、もう一つは先に述べた師範学校によって作られたものである。特約中心学校とは、既設の学校の中で虚心に研究を行い、熱心に仕事をなし、業績の優れたとされた学校を選んでその学校と提携して結んで中心学校にするものである。師範学校が成立された当初は、当時、郷村教育のモデル学校として影響がある燕子磯、堯化門という二つの特約学校と曉荘師範に作られた曉荘小学校から発足した⁶⁾。曉荘小学校は、曉荘師範が最初に建設した「中心学校」であった。同校は1927年3月5日に開校した。校舎は最初捨児岡長生殿という神社仏閣を借用していたが、同年6月6日には新校舎が落成した。新校舎は、壁が土で屋根がちがや(茅草)からできており、内部には、生活室と呼ばれた教室が三つ、寝室が三つ、事務室、博物館、図書館、衛生室、売店、倉庫、便所があった。周囲には、農場が三つ、公園、グラウンドがあった。子どもの数は開校当初は32人であったが、二年後の1929年秋には70人になっていた。スタッフは、校長には師範学校の指導員が就任し、教師は師範学生が交替で担当していた。

中心学校では農村地域の実態を踏まえ、生活教育の目標を次の五つに設定した。その五つの目標とは「健康な身体、労働の手腕、科学の頭脳、芸術の興味、社会改造の精神」である。陶行知によると、このような五つの目標は主に以下の生活活動を通して実現されるのである。健康な身体は中国の伝統的な武術によって達成する。労働の手腕は園芸によって習得する。科学の頭脳は生物学を利用して育てる。芸術の興味は戯劇によって養成する。社会改造の精神は団体の自治によって育てる(2-444)。

貧しい農村における学校運営を維持するために、経済面における資金不足を乗り越えなければならなかった。曉荘師範学校と中心学校としての曉荘小学校を建設するにあたって、陶は最大限で節約した。彼は農村教師は最小の経費でもって最もすぐれた教育を行わなければならない(1-88)と信じていた。当時「単級学校」の創立経費は、建築費を除外しても最低160元必要とされていたが、曉荘各小学校の創立経費は、曉荘小学校が100円で、他の5つの校は一律に40元であった。当初の一般の郷村小学校の年間1,000元以上の経費に対し、曉荘小学校は、教師らの食費などを除外して年間192元の支出で運営されているのである。このような経済的なやり方は、貧困に苦しんでいる農村の状況に適合していると言えるであろう。それだけではなく、貧しい方法で中国における農村教育を立てる彼の考えに現実的に光を当てたことでもあろう。

中心学校の教師である曉荘の師範生は、交替で中心学校の仕事を受けるために、「前方」と「後方」との二つのグループに分けられた。中心学校の仕事を受ける「前方」の師範生は、

当初、二人一組、後に五人一組で中心学校の教師として、その管理運営のすべての責任を負っている。また、彼らは毎週一回の実習報告を提出するとともに、仕事で生じた困難や問題を師範学校の研究会や討論会に持ち寄り、師範学校の指導員や「後方」の師範生と議論した。こうして、理論学習を進め、研究精神と分析能力を養成して、さらにより実践を目指したものである。それに対して、師範学校にいる「後方」の師範生は、小学校の五教科である「語言文字」「公民訓練」「自然農芸」「健康衛生」「娯楽」に対応して、「国語算数」「公民」「自然」「園芸」「衛生」「遊戯娯楽」の六組に分けられた。そして各組は師範学校の教師の指導を受け、「前方」の師範生と交流し、郷村社会の「実際の生活」を中軸にし、かつ子どもの年齢に応じた教材を編集し、その教材を「前方」の師範生たちに提供した。

中心学校の教授の必要に応じるために、すべての生活を師範学校のすべての課程にしたが、このすべての生活——すべての課程は「教学做」である（2-355）。その概略は、以下の五つである（1-106）

1. 中心小学校の生活に関する教学做（国語と算数の教学做、公民教育の教学做、自然の教学做、園芸農作業の教学做、衛生保健の教学做、遊戯娯楽の教学做）
2. 中心小学校の行政に関する教学做（学校環境整備教学做など）
3. 師範学校第一院⁶⁾の事務に関する教学做（書類作成の教学做、会計の教学做、庶務の教学做、料理の教学做、衛生保健の教学做など）
4. 自然環境を征服する教学做（科学的農業の教学做、基本的な手工の教学做、衛生保健の教学做、造林の教学做など）
5. 社会環境を改造する教学做（村自治の教学做、平民教育の教学做、合作組織の教学做、郷村生活の教学做、農民娯楽の教学做）

教学做は暁荘師範のすべての課程であるが、「教学做合一」は暁荘師範においても中心的な教育方法であった。

陶は中国の実際の状況から出発し、「教学做合一」の方法で中国の実際の状況に相応しい教育を作ろうしたのである。彼は『中国教育改造』（1928）の自序の中で、次のように自分の見方を示している。

「この一冊は、私が中国教育を实践しつつ、手さぐりで一筋のひかりを見出そうとしてきた努力の所産である。以前の原稿を選ぶに当たって、私は一つの決心をした。それは外国教育制度のために人力車を引くような文字は、すべて削除して残さない。ここに収めたものは、すべて私の体験に基づくものにするということである。従って、私の書いたものは、すべて

私の信じるところであり、また私の行っているところである。」(1-3)

陶行知は、中国の実際の状況に基づいて、それに相応しい郷村教育を通して「農民の手腕・科学の頭脳・社会改造の精神」を有した、将来郷村教師になる師範学校の学生を育てようとしたわけであるから、これらの学生は「本の虫」ではなく、生活力があり、「単独または共同で自然を征服し、社会を改造する」(1-94) 力があるものでなければならない。陶は、そのような教師の存在を次のように述べている。

「彼が足跡を印すところでは、1年目には学校の雰囲気が生き生きとなり、2年目には社会が教育を信じるようになり、3年目には科学的農業に効果が上がるようになり、4年目には村に自治が成立し、5年目には生きた教育が普及し、10年目には荒れた山が林になり、無用の人間が生産に従事するようになる。」(1-104) このような教師がいる学校は、郷村生活を改造する中心として位置付けられている。当時の中国には、百万の農村があり、そのためには少なくとも百万の教師が必要であると彼は予言していた。

「農民の手腕・科学の頭脳・社会改造の精神」を育てることを趣旨とする曉荘師範学校には、師範生に「教学做」を指導する指導員がいる。この指導員とは、陶がかつて在職していた東南大学から招かれた教授たちであった。彼らに求められたのは、教室の中で書物に載っている知識を教えることではなく、学生とともに実際の「事」(なすこと)を通して共教・共学・共做・共生活をするのであった(1-107)。実践の中で学生に疑問を抱かせること、そして疑問解決に指導を与えることである。それに、学生にやってもらうことは教師自身が自らやらなければならない。学生に学ばせたい知識は、教師自身が身をもって共に学び、学生に守らせたい規則は、教師が身をもって共に守る。学生との共同生活の中で教師もたえず進歩を求めつつあるのである(1-43)。また、共教・共学・共做・共生活を通して学生に学習の楽しみを知ってもらうと同時に、学習の苦しさに耐えることを知ってもらうなければならない。このような指導員の「教学做」を指導するもつて、育てられた師範生—将来の郷村教師は中心学校の精神と方法を利用して他の郷村学校を造るのである。そして、その郷村学校は郷村生活を改造する中心となる。

中心学校で採用された「生活教育」は、子どもの全ての活動を指導することによって、学校教育と実際生活との融合を目指すものであった。また、陶によれば、学校生活は社会生活の起点である。社会を改造するために、学校を改造することからはじめなければならない。中心学校は自然社会に応じて絶えずに更新しなければならない。それに師範学校は中心学校に応じて改善し、地方学校は師範学校に応じて改善し、自然や社会は学校にともなう改善

するのである。

曉莊師範は実践的にも理論的にも中国における20年代の教育にとって新たな時代の幕開を示す存在である。このような学校のあり方は、中国の教育史においても画期的なことであった。南京北郊にあった曉莊の郷村教育運動、とりわけその中の共産党員による革命活動は、開校の当初から国民党南京政府の関心を集めていた。1930年4月3日南京下関にあった英国系資本の和記洋行の労働者は資本家の搾取と圧迫に反対し、大規模なストライキを行った。このとき、曉莊の共産党員学生が積極的に応援した。これを口実にし、1930年4月12日南京政府は曉莊師範学校を武力で閉鎖した。これによって三年間にわたった曉莊師範の活動に終止符をつけたのである。

3 曉莊試験師範学校を支える根本的なもの

曉莊師範学校は、開校から閉鎖されるまでわずか三年間の存在であった。当時の激動のなか資金不足にもかかわらず、その学校を維持することができたのはどうして可能だったのだろうか。筆者はその理由として次の三点をあげることができると思われる。第一は、農民を愛する心である。曉莊師範は、校舎もない、教員もなく開校された。学校のすべてが、郷村教育を変えるために、郷村教師を養成する校旨を理解する指導員と学生によって共に造られた。厳しい環境の中で彼らを支え、経済面における資金不足だけではなく、さまざまな困難を克服することができる根本的な動力は、教育によって農民を喚起し、中国の郷村教育を徹底的に改変することである。陶行知は多くの文章の中で郷村教育に従事する人々にとって農民を愛する心を持たなければならないことを強調している。彼は自分の基本的な教育思想を表明する「私たちの信条」(1926)の中で次のように述べている。

「郷村教育に従事する私たちは、私たちすべての心を三億四千万の農民に捧げなければならない。……私たちの心はいつも農民の苦楽で満たさなければならない。私たちは常に農民の苦しみを思い、常に農民の幸せを願い、農民の苦楽が化した心を持たなければならない、そうしてはじめて農民のために奉仕し、郷村生活を改造する使命を担う資格を得られるのだ。一人ひとりの郷村教師の心すべてを農民の苦楽が化したものにできさえすれば、彼らは中国の一つひとつの郷村を天国に変え、楽園に変え、中華民国の健全な自治単位に変えることができると、私は深く信じている」(1-87)

また、「曉莊三歳敬告同志書」の中でこのように言っているのである。「曉莊は愛から生まれた。愛がなければ、曉莊は存在できない。彼は人類を愛しているから、人類の中で最も多

数かつ最も不幸の中華民族を愛する。中華民族を愛しているから、中華民族の中で最も多数かつ最も不幸の農民を愛している。」(2-556) このような愛情があるからこそ、曉荘師範が閉鎖されたとしても、曉荘の精神はまだ生きているのである。それだからこそ後に「工学団」⁽⁷⁾ という形で再発足できたのである。

第二は、自由の組織である。曉荘には、集団生活を順調に進めるために、規則があるが、基本的には個人の自由を重視している。曉荘における生活が個人の選択によって決められるのであるが、個人への要求は計画があることだけである。計画があれば、その内容が何か、いかに実現するかということは個人の自由に任せることである。このような自由の環境のもとで、学生の生活力を育てようとするのである。この自由の組織は曉荘の実践活動を支えるもう一つの基本的なことであろう。

第三は、経済的な面における節約である。第二章では述べられたように、貧しい農村社会において教育を普及させるために、最大な困難は経済的なことである。曉荘の学生と教師は、力を合わせて校舎自体まで自分の手で造ったのである。それだけではなく、学校を営む日常生活の面においてもさまざまな工夫を凝らした。事務などの仕事はすべて学生によって交替で担当している。少ないお金で立派な教育を造る陶行知の主張を徹底的に貫徹しているのである。これも曉荘師範を維持する重要なことである。

最後に言及しなければならないのは、曉荘にある自衛組織である。土匪の略奪から実際の生活を守るために、曉荘の師範生を中心として農民を組織し、自衛団を作ったのである。これも曉荘師範を継続させるのに見逃せないことである。

結 語

教学做合一を中心とする生活教育理論が曉荘師範においてただ三年間実践されたが、それは、中国において長く理論と実践との分離をしていた、書物を中心とする伝統的な教育を脱却するために、重大な意義があるのである。アメリカ留学より帰国した陶行知が、外国の教育理論のために人力車を引っ張ることを一切せずに、中国の現実に目を向けてそれに最も適応する教育理論と方法を探りつつあった。そのこと自体は、彼の理論と実践との統一を求める精神を現わしたものと言えるであろう。陶によれば、生活力がある教師によって生活力がある学生・国民を養成する。そこで、教師を育てる師範学校を建設するのは非常に重要な仕事である。曉荘師範はその見方による試みの一つである。

中国において教育が重視されているが、その責任を担う、陶行知に「靈魂」と喩えられた

教師の養成についてはそれほど重視されていないようである。陶行知は、中国の教育の出口は人口の大半を占めている農村教育にある。それを実現するために、農村教育に相応しい教師を養成しなければならないと主張した。この見方は、現在行われている素質教育を中心とする教育改革にも大きな示唆を与えるであろう。

素質教育は基本的には都市、特に経済的に発達している大都市を中心として始めた。しかし、それは、格差が大きな農村部の現状には相応しくないことが多い。それにもかかわらず、行政的な力によって素質教育を中国全土にわたるように推進しようとしている。しかし、政策として実行されても効果があまりみられないのが現実である。中国を変化させるために、教育を変えなければならない。教育を変えるためには、まず農村の現状と適合した教育に変える必要があるのである。陶行知の生活教育理論についての考察は、これまでの彼に対する評価にかかわるばかりではなく、その理論自体の今日の可能性を検討するときは、不可欠な作業であろうと思われる。

※注

(1) 第一章の生活教育理論については、既出論文において詳しく論じた。この章はその議論をもとに再構成したものである。

(2) 生活教育についての定義は主に以下のようなものである。

「生活教育とは 1. 生活の教育 2. 生活によって生活を影響する教育 3. 生活の必要に応じて行う教育である。(Life education means an education of life, by life and for life)」(「生活教育の目前の任務」1918年、4-268『陶行知全集』第4巻、268頁を示す。以下同じ。)

「生活教育は、生活の教育、生活のための教育、生活を向上したり進歩したりするための教育である。」(「中国の民衆教育家」1919年、4-812)

「生活教育は、人民の教育、人民が人民を教育する、人民が自分の生活を向上させるため、そして進歩するために求める教育である。」(同上、1927年、4-812)

「生活教育は、生活自らあり、生活自ら営み、生活に必要なものである。(Life education means an education of life, by life and for life)」(「現代の生活教育を普及する道」1934年3-246)

「生活教育は、生活に与える教育、生活によって教育する、生活を向上させるために必要な教育である。」(「談生活教育」1939年、4-428)

(3) 曉莊師範の募集対象は、初級中等学校の学生、高級中等学校の学生、専門大学に在学して卒業するまで残り一年半となっている学生、及び同等程度の在職の教員などである。しかし、農作業か土木作業の経験がなければ、上記の資格があっても受かる可能性はなかった。また曉莊師範の学生募集広告に特に以下のことが明記されていた。「有名になるためのもの、本の呆、肩書をもらうためのもの、来る

べからず。」(1-107) ここからもわかるように、曉荘師範は学生の実践能力を重視しているのである。

(4) 陶は「普及教育運動の小史」(3-117)の中で、自分の仕事について次のように説明している。

「このほぼ二十年来、私は、時には平民教育を提唱し、時には郷村教育を提唱し、時にはまた苦痛が多い勤労大衆の教育を提唱してきた。私の胸中を知らない人は、私の見解がしばしば変わり、新しい流行を好んでいるかのように言っているようだが、その実、私の胸中には、一貫してただ一つの問題があっただけのことである。ただ一つの問題というのは、どのようにして教育を普及させるか、どのようにして、教育を受ける機会のない人々に、彼らの要求する教育を受けさせるかという、この問題だったのである。」(3-117)

なぜ彼はこのほぼ二十年来、ずっと教育普及運動に熱中してきたのか。「平民教育概論」(1924)の中で次のように自分の意図を明確にしている。

「中国の政治は不統一であるけれども、教育は統一である。私たちは統一的な教育が統一的国家の成立を促しうると深く信じている。」(1-681) ここからも陶行知の教育による救国の考え方がうかがえるであろう。彼は教育による救国の目的を達成するために、「中華民族の出口と中国教育の出口」(1931)の中で、その具体的な方法をも提示した。第一は、人に子どもを少なく生むことを教えることで、第二は、人に豊かな社会を創ることを教えることで、第三は、人に平等かつ互助の世界を立てることを教えることである。同じ論文の中で子どもを少なく生むこと——人口制限のことを中心に、多くの資料を使って論述した。彼によれば、人口の急増が世界中の戦争に導く重要な原因の一つである。それゆえに、人口の問題は中国だけのことではなく、世界の問題である。世界の人々は協力してこの問題を解決しなければならぬと強調している。少なく子どもを生めば、みんな共栄できるのに対して、多く生めば共亡することになるのである。中国にとって、少なく生むこと自体は民族を救うことでもある。

新中国が成立した以降、他の学者もそのことを主張したが、毛沢東の人が多ければ多いほど、力があるという見解と対立したので、否定されてしまったのであった。70年代の末になると、政府は再び人口の問題に目を向けざるを得なくなった。そして有名な「一人っ子」政策を始めた。陶行知が早く1931年政府より約半世紀の前に人口制限の問題を提出したことは、学者の卓見を表わすだけでなく、それについて再評価する必要があるのではないと思われる。

(5) 中心学校を基本とする曉荘師範は、1927年開校当初、中心学校としての曉荘小学校と、二つの特約中心小学校——燕子磯小学校と堯化門小学校があった。1930年に閉鎖されるまでに、次の5つの中心学校を新たに開設した。それは、吉祥庵小学校、万寿庵小学校、三元庵小学校、神策門(平和門)小学校、黒墨堂小学校であった。(2-385、2-389)

(6) 曉荘師範は二つの院、すなわち、第一院と第二院によって形成すると構想された。第一院はすでに他校に在学して卒業するまで残り一年半となっている学生と、それと同等の在職の教員を対象とするものであったのに対して、第二院は師範教育のすべてを最初から曉荘で行うものとされた。第二院より第一院の方が容易に実現できるところから、曉荘師範は第一院から開校された。(1-107)

(7) 陶行知は「どんな教育を普及するか」(3-126-127) (『普及什麼教育』1934)の中で、工学団の意

味について次のように述べている。工とは工作つまり仕事で、学とは科学、団とは団体で、力の集まり、力の組織、力の集中、力の共同的で發揮することである。仕事に励むことで生命を養い、科学をもって生を明らかにし、団体で生命を保つのである。より端的に言う、大衆の仕事で大衆の生命をつちかい、大衆の科学で大衆の生命を明らかにし、大衆の団体の力で大衆の生命を守る、ということである。工学団は一つの小さい工場、一つの小さい学校で、一つの小さい社会である。そこに生産の意義、進歩の意義、平等で助け合って自衛と人を守る意義が含まれている。それは工場、学校、社会を一つにするものである。1932年10月1日、上海市北部と宝山区にまたがる地域に、宝山区の山と上海の海をとって山海工学団を開設した。開校当初、小学生の20名たらずであった。

● 曉莊師範の修業年限

修業年限は基本的には一年半と決められたが、具体的な状況に応じて延びたり、縮めたりする可能性がある。修業を終えてからも、半年間仕事をしなければならないことになっていた。この半年間の仕事について曉莊師範の教師の評価結果によって、卒業証明書を授与するのである。(1-108)

参考文献

- (本論における陶行知の文章の日本語訳は、下記の翻訳書・研究書に多くを負っている。論の進行上、一部改めた場合がある。訳者の方々のご寛恕を請うとともに、先人の訳業に感謝したい。)
- 阿部洋編『現代に生きる教育思想』8アジア きょうせい出版社、1981年。
- 斎藤秋男著『陶行知生活教育理論の形成』明治図書出版社、1984年。
- 周洪宇編『陶行知研究在海外』人民教育出版社、1991年。
- 陶行知著『陶行知全集』四川教育出版社、1991年。
- 陶行知著、斎藤秋男訳『民族解放の教育』明治図書出版社、1974年。
- 白韜著『陶行知的生平及其学説・陶行知先生記念集』上海書店、1992年。
- 牧野篤著『中国近代教育の思想的展開と特質——陶行知「生活教育」思想の研究——』日本図書センター、1993年。